

の激しさに驚きはしたものの、まだ外へ通げる気はしないで、たゞ、裏続きの家の大銀杏が折れでもしたら大変だと思つて、濡縁から覗いてみると、父に急立てられて、火鉢のひを消して庭へ下りた。籐椅子を楓の木の下に持出して父を慰ませ、懐中時計を眼の前の檜葉の枝に吊したり万年筆などを持出してゐる中に、消魂しい警鐘の音に気付くと、其処から正面に見える行人坂の上に濛々と白煙が巻上つてゐて、間々赤いひの手さへ見え、大きな爆発の音が交る度に黒煙がうづ巻いて立昇つた。その中へ怖ろしい鳴動と一緒に第二第三の激しんが来た。間を見ても外へ出て見ると近所の煉瓦塀が跡方もなくくづれてゐたり屋根瓦の落ちてしまつた家が見えたりして、初めて人死といふやうな事が考へられた。旺に燃える坂上の火事は、目黒駅裏手の陸軍衛生材料廠だと解つた。

其処へ近所にゐる友人が声を掛けて来た。出て見ると、原稿だといふ風呂敷包を背に縛つてゐた。少し落付いたので蠟燭や食物を買ひに町通へ出て見ると、材木屋が一軒、道を狭めて倒れてゐた。かん／＼明るい日の下に、くわ事の煙は大きくなるばかりだった。郵便局の前で訊くと、電話は不通だった。向を変へてゐるポストへ郷里の家や親戚へのハガキを投込んで交番に行つて見ると、まだ气象台から何の通知もないといふ事だった。途中で聴いた噂で東京市内が大部酷いといふ事だった。家へ戻つて父と椅子を並べて、このちしんで世相が変るだらうといふやうな話をしてパンとトマトを食べた。

くれない中と思つて、大体座敷を掃出したり、庭へ板を並

べたりしてゐると、坂の上へ実に大きな美しい雲の峯がたつて夕焼がした。如何にも天変地異の後らしかった。(後で解つたが、これはくわ事のけむりが凝り集つたものだった。)

日がくれて、昼間来た友人が、九段の上まで市内を見て来たといつて立寄つた。それで市内に大火が起つてゐる事を知つた。臙気ながら東京の半分位全滅しさうに考へられた。今夜あたり市内には物怖ろしい事が起らねばい、が……そんな事を暗がりの縁側で話した。八時頃、庭に出したひばちでうどんを煮て玉子をかけて食べた。十時半になつて、案じてゐた弟が無事に日本橋の勤め先から藁草履を履いて歸つて来た。その話で市内の惨状や有楽町の叔父の家がやけた事などが分明した。

午前三時頃、十通ばかり書いた手紙を市内のポストへ出さうと外へ出ると、下弦の月の冴えわたる下に、東京のやけるひとけむりが物凄く仰かれた、群をなして市内を逐はれて田舎を指して落ちてゆく避難者の中を縫つて目黒駅の前まで坂を上ると、西南の空に遠く横浜が燃えてゐるひが映るのが見えた。一時間ばかり其処にゐる裡に様々な悲さん事が想像された。風向に依つては、何時その辺へもひの手がのびやうも解らなかつたので、手紙は坂を下りて昼のポストへ入れて家へ戻つた。

庭先の椅子に戻ると、何時か、言ふべくもない美しい雲を浮かべながら、不安な一夜も白々と明けか、つてゐた。すると、詩が一つ出来た。